

(3) 口唇裂・口蓋裂で複数回の手術を受けた子どもの体験に関する研究
川崎医療福祉大学大学院 保健看護学専攻 修士課程 ○松田 美鈴
川崎医療福祉大学 保健看護学科 中新美保子

【要 旨】

子どもの手術で最も多いのは、先天性奇形の手術である。口唇裂・口蓋裂は、新生児約500人に1人の割合で発生するといわれ、外表奇形の中では最も発生頻度の高い疾患の一つである。口唇裂・口蓋裂の治療は乳幼児期から成人に至るまでの長期に渡り、さらに成長に応じて複数回の手術を必要するため子どもや家族の負担や苦悩は大きいことが報告されている。何度も処置や検査を受けている子どもは、医療者から「慣れているから大丈夫だろう」と捉えられる傾向にあり、援助ニーズが見落とされやすい存在にある。先行研究において、口唇口蓋裂児の母親の疾患に対する手術への受容過程や心理状態についての研究報告は広く行われているが、子どもたちがどのように手術に向き合い、どのような影響を受けているのかについて明らかにしたものはみられない。

本研究は、口唇裂・口蓋裂で複数回の手術を受け

た子どもの体験を明らかにすることを目的とした。対象は口唇裂・口蓋裂で複数回の手術を受けた体験を持つ中学・高校生12人であった。半構成面接法によるインタビューを実施し、質的帰納的に分析を行った。その結果、〈生まれつきだから病気とは思っていない〉、〈生まれた時からだから通院や手術は特別ではない〉、〈手術への不安や恐怖と聞いても理解できない説明〉、〈複数回の手術に心構えをして臨む〉、〈手術室看護師や麻酔医師の対応で安心できた〉、〈周りの協力で励まされて入院生活や治療を頑張れた〉、〈術後の痛みと活動制限への不自由さ〉、〈自分の口唇裂・口蓋裂に対して自責の念をもつ母への気づかい〉、〈どうすることもできないいじめ〉が抽出された。口唇裂・口蓋裂で複数回の手術を受ける子どもは、疾患を生まれつきで通院や手術を特別なことではないとしながらも、治療を継続する中に様々な葛藤を抱えている現状が明らかになった。